

ひそかに 読まれている本

『ジェイン・オースティンの手紙』

新井潤美編訳

岩波書店 定価 987 円(本体 940 円+税 5 %)

Tel.03-5210-4111



棘のあるユーモアが踊る手紙

平尾隆弘 (編集者)

ジェイン・オースティンの手紙は、その作品(『高慢と偏見』『エマ』など)と同じように、否それ以上に、英国の田舎のこまごました日常生活の羅列である。家族や親族の近況、知人たちのゴシップや人物評定、退屈をまぎらす舞踏会や衣・食・住のエピソード……。

彼女は、相手に直接話すとおりに書くのが手紙のコツだといっている。大半は2歳上の姉・キャサンドラ宛だから、いわば一姉妹のありふれた日常会話が1冊の本になったわけである。いったいどこが面白いのか。

まず18世紀末～19世紀初頭の英国風俗を知る楽しさがある。だがそれ以上に、オースティンの作品に少しでも関心があれば、本書には尽きせぬ興趣を駆りたてられる。たとえば次のような皮肉の効いたユーモア。

《ホール夫人は昨日、予定日の数週間前に死産してしまいました。何かショックを受けたからだということです。うっかり夫の姿を見てしまったのでしょう》(P.47)

《ポートマン夫人のドーセットシャーでの評判はあまり芳しくありません。例によって、気のいい世間の人々が彼女の美しさを褒め称えたので、近所の人々は皆、実物を見て失望する楽しみが得られました》(P.54)

《ジョン・ライフフォード夫人は未亡人の身分があまりに気に入って、またまた未亡人になるおつもりようです。グロスターの銀行家フェンダルさんと結婚なさるそうで、たいへん裕福な方ですがかなり年上で、小さな子供が三人います》(P.155)

『高慢と偏見』を「世界の十大小説」にあげたサマセット・モームに、有名なオースティン評がある。

《どの作品にもこれといって大した事件は起らない。それでいて、あるページを読み終わると、さて次に何が起こるのだろうか、急いでページを繰らずにはいられない。ところが、ページを繰ってみても、やはり何も大したことは起らない。だが、それでいて、またもやページを繰らずにはいられないのだ》

要するに、オースティンは「何を書くか」よりも「いかに書くか」を大切に作家であった。そのことは、自作について、「細かい毛筆を使って、どんなに手間をかけても効果がほとんど目に見えないものを描いた小さな(2インチ幅の)象牙のような私の作品」(P.450)と記していたり、作家志望の姪に対する創作上のアドバイスを読めばよくわかる。彼女が、本を書く女性の中で「もっとも無知で無教養な人間だと自慢することができる」(P.427)と書くとき、それは決して「高慢」でも「偏見」でもなかった。

匿名で小説を発表していたオースティンは、自分の手紙までが、21世紀の日本で読まれるなんて想像もしなかったろう。彼女がいまの日本にいたら、プライバシー侵害だと皮肉をこめて言ったかもしれない。しかし、戦争や革命を主題にした「大小説」とは異なる場所で、彼女の小説は読みつがれていく。ジェイン・オースティンは、世界文学における歴とした「公人」で、その手紙は「公共の利害(public interest)」に属している。

